

■ 明倫祭の宝物 ■

普段の学校では見られない生徒たちの姿を見るのは実に楽しい。県立音楽堂のコンサートホールでの明倫祭2日目は、充実の時間だった。吹奏楽、合唱、演劇の文化部の発表を楽しんだ上に、プロのマリンバ演奏も聴けた。

1年生の合唱コンクールの決勝は聴き応えがあった。前日の学校での予選に比べても、一段と出来はよかった。審査で票が割れるほど甲乙付けがなかった。



2年生のクラス発表はエネルギッシュだった。校内では穏やかな振る舞いの生徒が多いので、ちょっと驚きだった。よくまあ、あれだけ身体が動くものだ。

ステージの発表だけでなく、観客としての態度も総じてよかった。静聴するところと盛り上がるところがきちんと意識できており、誰もが良識的だった。保護者の方々にも多数ご来場いただいたことを考えれば、校外の施設でのイベントもいいものだ。

夏休み後半は、補習と部活動に加えて、明倫祭の準備に生徒は何かと忙しい。学校祭に付きものの模擬店やお化け屋敷などの1日目の企画と2日目のステージ発表の両方を仕上げるには、相当苦勞もあったに違いない。

さて、行事やイベントを開催するときは、準備・本番・後始末のうち、後始末が最も重要だと私は考えている。準備や本番では楽しみの方が大きく、生徒自身にもホームで盛り上がりたい気持ちが働く。そのため、前向きで協働が生まれやすい。しかし、達成感の余韻の中でやって来る後始末は、疲れも伴ってとにかく誰かがやればいいという気持ちになりやすい。そういう仕事こそ前向きに進んでできる人になってほしいと考えているからだ。

初日、クラス企画や模擬店が終了して1時間たった頃、様子を見に校長室を出た。前庭では、模擬店の撤収が佳境に入っている。意外と楽しそうにやっている。3年生の生徒に声をかけてみた。「みんなで協力してできていますか？ 最後まできちんと片づけられますか？」。すると、「大丈夫です。明倫生ですから」と返ってきた。

うれしい返事だった。この言葉は、「どのような生徒でありたいか」を考え、本校の生徒であることに誇りを感じていなければ出てこない。校長として、こんなにうれしいことはない。「明倫生ですから」。志向倫理に基づいた内発的なひと言は、私の夏休みの宝物になった。言葉を胸に収め、安心して任せることにした。

「祭りの後の寂しさ」に浸っている間もなく、新学期が明けた。明けるとすぐに、夏休み中の学習の成果を試すテストだ。セルフコントロールができて、メリハリのある生活を送れていると思うが、親心からか少々心配にもなる。

でも、心配するのはよそう。「受験勉強は進んでいますか？ テストの勉強はできていますか？」という質問にも、ほとんどの生徒が、「大丈夫です。明倫生ですから」と答えてくれると信じることにしよう。